

西行の歌に対する定家の批評： 『宮河歌合』の判詞について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1999-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 武田, 元治 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/1415

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



西行の歌に対する定家の批評

——『宮河歌合』の判詞について——

武 田 元 治

文治三年（一一八七年）、七十歳の西行は、伊勢神宮に奉納する三十六番の自歌合二種を撰び、それぞれの判を藤原俊成と定家に依頼した。正編に当たる『御裳濯河歌合』の俊成の判は年内に完了したと見られるが、続編に当たる『宮河歌合』の定家の判は遅れて文治五年（一一八九年）に完了する。定家二十八歳の時のことである。

本稿では、『宮河歌合』の歌に対する定家の判詞を、否定的な批評と肯定的な批評とに分けて整理し、西行の歌を定家ほどのように見ていたかを追究したい。また定家の批評の特徴などについても考えてみたい。

なお、本稿は前稿「西行の歌に対する俊成の批評——『御裳濯河歌合』の判詞について——」（大妻女子大学文学部三十周年記念論集）と、テーマの上で関連するものである。

一 否定的な批評

定家にとって西行は、父俊成の世代に属する大先輩の歌人であるだけに、『宮河歌合』の定家の判詞で否定的な批評をした部分は、『御裳濯河歌合』の俊成の判詞で否定的な批評をした部分に比べても、格段に少ない。

しかし『宮河歌合』三十六番の判詞の中には、否定的な批評が五例見られる。それを、(一)歌の心に関する批判と、(二)歌

の詞ことばに関する批判とに分けて挙げ（歌の姿に関する批判と見られるものはない）、それぞれ批判の対象となった歌と判詞の要所を挙げて考察する。本文は『新編国歌大観』による。

(一) 歌の心に関する批判

① からすばにかく玉づさの心ちしてかりなきわたる夕やみの空（十九番右、負）

鳥羽の玉章（たまづさ）、あとなき事にはあらねど、ちかき世より人このみよむ事に待るべし。

西行の歌に、夕やみの空を飛ぶ雁の姿の定かでない様子を「からす羽にかく玉づさの心ちして」と詠んでいるのを、すでに詠み古された発想として、定家が批判したものである。

「鳥羽の玉章」のことは、『日本書紀』敏達天皇元年の条に見える、高麗の上表文が黒い鳥の羽に墨で書かれていて容易に読めなかったことに関する故事で、これを詠んだ和歌は『日本紀竟宴和歌』にも見られるが、平安時代後期にはこれを詠み入れた次のような歌がある。

わが恋はからす羽にかく言の葉のうつさぬほどはしる人もなし（『堀河百首』一一四一、藤原顕季）

人しれぬことをかきけるからす羽を見るよりうつるわが心かな（『為忠家後度百首』五六七、藤原為忠）

西行の歌は、この故事を用いた上に、漢の蘇武の雁信の故事によって「かり」と「玉づさ」に縁をもたせているが、一首の趣向の眼目となる「鳥羽の玉章」の故事が詠み古されている点を定家は批判したのであろう。

(二) 歌の詞に関する批判

① わかなおふる春の野守に我成りてうきよを人につみしらせばや（三番右、負）

末の句やなべての歌には猶如何にぞ聞ゆべからん。

西行の歌の下句を、定家は問題にしている。

この下句は「摘み」に「罪」を掛けた詞の技巧に特色があるが、憂き世での罪を人に自覚させたいという仏教思想に基

づく感想が、新春の若菜のイメージにそぐわない点を指摘したものかと思う。下句の詞に關する批判であるが、歌の心に對する批判にもなっている。

②山桜かしらのはなに折りそへてかぎりの春の家づとにせん（七番左、負）

頭の花にとおける、此歌にとりてはさこそはとみゆれど、霜雪などはつねに聞きなれたる事なるを、花といへるもある事にはあれど、いかがと聞え侍るにや。

「かしらの花」の語について、「かしらの霜」「かしらの雪」のように通常用いられる言葉でない点を、定家はとり上げて批判している。

白髪を花に例えることは、定家の指摘するとおり一般的でないし、見様によっては似合わない比喩とも見られるであろう。ただ早く『千里集』には、

くろかみのはかに白くなりぬれば春の花とぞ見えわたりける（一一四）

の一首が見える。そして、この千里の作に基づいて西行が詠んだと思われる歌が『聞書集』にも出ている。

ながむながむちりなむことを君もおもへくろかみ山に花さきにけり（五九「老人見花」）

花の色にかしらのかみしさきぬれば身はおい木にぞなりはてにける（六五「寄花述懐」）

などが、それである。しかし定家は、「かしらの花」の語を十分に完成された表現とは認めなかったと見られる。

③をしまれぬ身だにも世には有るものをあなあやにくの花の心や（八番左、負）

あなあやにくのとおける、人つねによむ事には侍れど、わざとえんなる詞にはあらぬにや。

歌の第四句に「あなあやにくの」の語を用いたのを、一般に歌によく見られる言葉ながら、「艶なる詞」ではあるまい

と批判している。

この語は例えば『後拾遺集』の歌にも、

いかにせんあなあやにくの春の日やよはのけしきのかからましかば（六八三）

などの用例があるが、好ましくない気持ちを表す語であり、優雅な歌語とは見られなかったのであろう。また、このように「花の心」をあしざまに言うのは花の歌としての本意に背くと見られる点もあつたかもしれない。

④哀あはれあはれ 哀此世はよしやさもあらばあれこむ世もかくやくるしかるべき（三十六番右、持）

此世とおき、こむ世といへる、偏に風情を先として、詞をいたはらずは見え侍れど、かやうの難は此歌合に取りては、すべてあるまじき事に侍れば、なずらへて又持とや申すべからん。

「この世……こむ世」と詠んだ歌に関して、「偏に風情を先として、詞をいたはらず」と、一応批判を加えている。

これは一首が現世と来世とを対照させる趣向を第一として言葉を無造作に用いている点を指摘したのであろう。この点は「この世」と「こむ世」とに即して見れば文字病が考えられている可能性も否定できないが、歌全体として第一句と第三句の字余りが示すように、形にとらわれず情の赴くままに言葉を続けたところが、それを意識した批判であらう。

以上、『宮河歌合』の西行の歌に対する定家の否定的な批判の見られる五例をとり上げて多少の考察を加えた。歌の姿に関する批判はなく、歌の心に関する批判が一例、歌の詞に関する批判が四例であった。その中で歌の詞に関する批判が多いのは、西行の自由な言葉遣いが、言葉を重視する定家の立場と合わなかつたためと思われ、二人の表現上の立場の相違を示していると思う。

これを『御裳濯河歌合』の西行の歌に対する俊成の否定的な批評の場合と比べてみると、俊成の場合は、歌の姿に関する

る批判は強いて挙げれば一例、ただこの例は結局は肯定的に評価する過程で否定的な評語を用いたものであり、歌の心に
関する批判が四例、歌の詞に関する批判が八例である。用例数全体としては俊成の場合に比べて定家の場合は少ないが、
西行の歌に対して歌の姿を否定的に評することがほとんどない一方、歌の詞を否定的に評することが相対的に目立つよう
な点は、俊成と定家とに共通している。西行独自の自由な歌の姿は理解するが、歌の詞は自由すぎるところがあると俊成
も定家も考えたと思われる。

一一 肯定的な批評

『宮河歌合』の判詞で、定家は西行の歌にどんな特長を認めているのか。定家の判詞のうち肯定的な批評の占める部分
は多いので、ここではその要点を示す評語をとり上げて考えてみたい。

その場合に、定家が西行の歌の特長と見るところは、定家が西行以外の人の歌の長所として挙げるところと比較しないと、
明らかににくいかと思う。そのため、定家が判をした『千五百番歌合』秋四、冬一の判詞から歌の長所に触れた
評語を抜き出し、対比して考察の手掛かりとしたい。『千五百番歌合』は、判詞完了の時期の上では『宮河歌合』から十
三年ほど遅れて、当時の代表的歌人三十人を作者とする晴の大歌合として成立しており、定家の判をした秋四と冬一だけ
でも番数が百五十番に及んでいる。それで三十六番の『宮河歌合』と対比するのには多少不便点があるが、より適当な
歌合が他に見当たらないので、条件の相違を念頭に置いて参照することにする。

長所に関する評語の使用状況の概略を、一覧表にまとめてみた。表1は、『宮河歌合』の定家の判詞に用いられた評語^{注1}
とその使用回数を挙げ、またこれと対比する形で『千五百番歌合』秋四冬一の定家の判詞に用いられた評語^{注2}とその使用回
数を挙げた。評語は使用回数が多いものから順に並べたが、例えば「あはれなり」と「あはれふかし」のような同類と見

『宮河歌合』二十五種、『千五百番歌合』三十九種である。ただ前述のとおり『宮河歌合』が三十六番であるのに対して『千五百番歌合』秋四冬一は百五十番で四倍以上の番数であることを念頭に置くと、定家が『宮河歌合』で西行の歌の長所に関して用いた評語はかなり多く、種類も多様にわたっていると考えられる。

では、『宮河歌合』で定家の用いたその諸評語のうち、特に西行の歌の特長に触れる評語は、どのようなものであろう。用例数の多いものから順に、『千五百番歌合』の評語使用の状況と対比しながら見当をつけてみる。

『宮河歌合』の諸評語の中で用例数の多いものの内、「よろし」(五例)、「をかし」(四例)、「優なり」(四例)等は、『千五百番歌合』の場合も含めて一般に多く用いられ、かなり広い意味で使われる賛辞で、特に西行の歌の特長に触れる点は見いだし難い。それに対して「あはれなり」(四例)と「あはれふかし」(二例)は同類の評語と見られるが、『宮河歌合』の用例が一般の用例に比べて多く、これは定家が西行の歌にそういう特長を見いだす場合が多かったことを示すと思われる。また、これと同様に見られるのが「心ふかし」(三例)、「ふかし」(二例)、「おもひ入る」(二例)の類で、このような作者の思い入れた状態に関する評語の相対的に多いのは、西行の歌にその特長が相応に認められているのであろう。

なお用例数はさして多くはないが「さび」(二例)や「きよし」(二例)は、『千五百番歌合』の定家の判詞に用例がないから、考慮してよい評語であろう。一方、「やすらかにいひくです」(一例)、「とどこほる所なくいひくです」(一例)、「とどこほる所なくいひながす」(一例)の類は、『宮河歌合』の用例が相対的に多いので、西行の歌の特長にかかわるところがありそうである。また、「詞巧みなり」(一例)、「詞心巧みなり」(一例)も、特定の方面での言葉の巧みさを評したと思われる「言のはのよせあり」(一例)と併せて見ると、同様に西行の歌の特長と定家が見たところにかかわるかと思われる。その外、「心ふかくなやまず」は、用例は一例のみであるが、西行が「贈定家卿文」の中で、自作に即した適切な評語と認め、「これあたらしくいでき候ぬる判の御こと葉にてこそさふらふらめ」とも言っているから、注目される。

以上、『宮河歌合』で西行の歌の特長に触れるところのありそうな定家の評語として、「あはれなり」の類、「心ふかし」の類を初め、「さび」、「きよし」や、「やすらかにいひくだす」の類、「詞巧みなり」の類、また「心ふかくなやます」に、さしあたり注目してみた。

これらの評語が定家の判詞の中で実際にどのように入れられているかという点は、後に検討することにして、ここで表2について、『宮河歌合』での定家の評語の使用状況を、『御裳濯河歌合』での俊成の評語の使用状況と対比して見ておきたい。両歌合は各三十六番の西行の自歌合として姉妹関係にあるが、定家の判詞は俊成の評詞よりも約二年遅れて完成されているので、定家は判詞を書く際に父俊成の評詞を参照したと思われる。すると、それに応じて定家の評語の用い方が俊成の場合に似てくる可能性が考えられるが、その上で相当異なる点があるなら、判者としての両者の相違を探る手掛かりが得られるであろう。その意味で対比して参考にしたいと思う。

各歌合の評語使用数の総計は、『御裳濯河歌合』の五十九に比べて『宮河歌合』は四十七で少ないが、評語の種類は、『御裳濯河歌合』の十八種に比べて『宮河歌合』は二十五種で多い。これは『御裳濯河歌合』で「をかし」(十四例)と「心ふかし」(十二例)を際立って多く用いているのに対して、『宮河歌合』では一部の評語を特に多くは用いず、評語を多様に用いていることに関係していると思う。

「よろし」「をかし」「優なり」など一般に広く使われる評語を除外して、西行の歌の特長に触れると思われる『宮河歌合』の定家の評語について見ると、比較的用例数の多い「あはれなり」の類や「心ふかし」の類などは、『御裳濯河歌合』で俊成がすでに先例を残している。ただ、俊成が「あはれふかし」(二例)の用例を残すのみであるのに対して、定家は「あはれふかし」(二例)の外に「あはれなり」(四例)とも言っている。また俊成が「心ふかし」(十二例)の用例を集中的に多数残しているのに対して、定家は「心ふかし」(三例)の外に「ふかし」(二例)、「おもひ入る」(二例)も用いている。そういう点で、定家は俊成に比べて、同様の内容を示す評語でも多様な言い方をしていると考えられる。

『宮河歌合』の定家の評語で、用例数のさして多くないものには、『御裳濯河歌合』の場合に限れば俊成の評語にないものが幾つか見受けられる。先に西行の歌の特長に触れると思われる『宮河歌合』の評語として注目したものについて見ても、「さび」は『御裳濯河歌合』に見えるけれど、「きよし」は見えない。同様に「やすらかにひくだす」の類や「詞巧みなり」の類も見えない。「心ふかくなやます」は無論見えない。これらの評語は、『御裳濯河歌合』での俊成の評語に限れば、それと関係なく定家は用いていることになる。

なお、逆に『御裳濯河歌合』の俊成の評語で西行の特長に触れると思われる主なものの内、定家が『宮河歌合』の判詞に用いなかった評語は、どんなものがあるであろうか。用例が同類の評語を併せて三例以上あるものから拾ってみると、「こともなく」(「こともなくよろし」一例、「こともなくうるはし」一例)の類と、「たけたかし」(二例)や「たけあり」(一例)の類とが、一応考えられる。ただし「たけたかし」の類は、『宮河歌合』に用いられた「たかし」につながる評語であろう。それに比べると「こともなく……」の類は、歌に目立った趣向や技巧を用いず素直に淡々と詠みくだされている場合に、俊成の用いた特色のある評語で、『宮河歌合』にはこれと直接結びつく評語は見られないようである。もっとも、これを表現、声調の面を中心にしたのが『宮河歌合』の「やすらかにひくだす」の類と見れば、そう見ることもできる。

いずれにしても、西行の歌の特長に触れると思われる評語の使用状況について、『宮河歌合』の場合と『御裳濯河歌合』の場合とを比較して概観すると、定家は俊成の評語の用い方を受け継いでいる一方で、より多様な評語の用い方をしたところがある。そのような点も含めて、先に挙げた「あはれなり」の類や「心ふかし」の類を初めとする定家の評語の具体的な用い方を、次に見ておきたいと思う。

1 「あはれなり」「あはれふかし」

『宮河歌合』の判詞には、「あはれなり」四例、「あはれふかし」二例の用例が見える。「あはれ」は平安時代にはしみ

じみとした情感を言う語として広く使われたが、和歌の評語の用例は「をかし」に比べるとはるかに少ない。『宮河歌合』にその用例が比較的多いのは、定家が西行の歌に「あはれ」な特長を認める場合が相応に多かったことを示すと思われる。なお俊成はその歌論で「あはれ」を重んじ、『御裳濯河歌合』の判詞にも「あはれふかし」の用例二例を残すが、「あはれなり」の用例はない。ただ他の歌合の俊成の判詞には用例がある。

定家が評語「あはれなり」を（「あはれに」「あはれなる」の形をとるが）用いて評したのは、次の歌である。

若菜つむ野べの霞ぞあはれなるむかしを遠くへだつと思へば（三番左、勝）

花をまつ心こそ猶むかしなれ春にはうとく成りにしものを（六番右、持）

わが心さこそ都にうとくならめ里のあまりにながらしてけり（二十七番左、負）

年月をいかで我が身におくりけむ昨日見し人けふはなき世に（二十九番左、負）

いずれも過去を回顧しての感慨を詠んだ作である。

「あはれふかし」を（「あはれふかく」の形をとるが）用いて評したのは、次の歌である。

山桜かしらの花に折りそへてかぎりの春の家づとにせん（七番左、負）

花よりも命をぞ猶をしむべきまちつくべしとおもひやはせし（七番右、勝）

かくれなくもにすむ虫はみゆれども我からくもる秋の夜の月（十五番右、勝）

この三首中の初めの二首は、同じ七番の左右の歌で、これに対して定家は、

左の、かぎりの春のといひ、右の、いのちをぞ猶といへる、いづれもあはれふかくは侍るを、

と左右共に「あはれふかく」と評している。その場合に、左の「限りの春の」、右の「命をぞ猶」を挙げてそう評しているから、老いて死を意識する心が花を愛する心とともに見られる点が特に「あはれふかく」思われているのであろう。なおこの二首を、「あはれなり」とされた四首と比べると、過去を顧みて感傷にふける態度があまり見られない。感傷にふ

けらず淡々と詠まれているために「あはれふかく」思われたところがあることも考えられる。

「あはれふかし」と評する三首中の最後の歌は、月に寄せた述懐の作で、これは次のような古歌によって詠まれたものである。

あまの刈る藻にすむ虫のわれからと音をこそなかめ世をばうらみじ(『古今集』八〇七、藤原直子)

さやかにも見るべき月をわれはただ涙にくもる折ぞ多かる(『拾遺集』七八八、中務)

こういう恋する身の上を嘆く歌によりながら、この一首はあらわに「泣く」「涙」などの言葉を用いず、澄んだ月が涙で曇る身の嘆きをさりげなく詠んだ点が、ここでも「あはれふかし」とされることに影響しているとも思われる。

2 「心ふかし」「ふかし」「おもひ入る」

『宮河歌合』の判詞には、「心ふかし」の用例が三例見られ、この評語が作者の思い入れている状態を示しているとなると、同類の評語として「ふかし」「おもひ入る」各二例があるのと併せて、この類の評語も比較的多く用いられていることになる。あるいは「心あり」一例もこの類に加えてもよいかもしれない。

「心ふかし」は、古く公任の『新撰髓脳』に秀歌の条件の一つとされているが、その後の歌合の判詞ではあまり顧みられなかったのを、俊成が判詞に生かして用いた評語である。そして俊成が「心ふかし」を特に多く用いたのは『御裳濯河歌合』以後のことで、この歌合の俊成の判詞での用例は十二例に及んでいる。これは西行の歌に思い入れの深い特長をもつ作が多い点に俊成が触発されたものであろう。そして定家も俊成に倣って「心ふかし」を『宮河歌合』で用いたかと思われる。その用例数は『御裳濯河歌合』の場合より少ないが、同類の評語「ふかし」「おもひ入る」などを自由に用いたところが見られる。

定家が「心ふかし」を用いて評したのは、次の歌である。

年をへてまつもをしむも山ざくら花に心をつくすなりけり(六番左、持)

うき世にはとどめをかじと春風のちらすは花を思ふなりけり（八番右、勝）

逢ふと見しその夜の夢のさめであれなながき睡はうかるべけれど（三十六番左、持）

哀（あはれはれ） 哀此世はよしやさもあらばあれこむ世もかくやくるしかるべき（三十六番右、持）

この四首中の終わりの二首は、同じ三十六番の左右の歌で、これに対して定家は、「両首の歌、心共にふかく、詞及びがたきさま」に見えると評している。二首は恋の歌であるが、仏者の視点を伴って詠まれ、左歌は仏教に言う「長夜」の睡りの方面から恋の妄執に目を向け、右歌は現世と来世を対照的にとり上げて恋の苦しみに関する嘆きを詠む。そういう点を、恋の歌として思い入れが深いと見たのであろうと思う。

初めの二首は花の歌で、定家は六番左歌を「花を思へる心ふかく、詞やすらかに」詠んでいると評し、八番右歌を「花を思へるあまりに、ちらす風をうらみぬ心、まことにふかく」と評している。六番左歌は、長年にわたって山桜の花を待ち、散るのを惜しんで思いを尽くしてきたことを回顧した作で、その花への思い入れの深さを特長と見ての評であらう。

八番右歌は、春風が花を惜しんで憂き世に留めて置くまいとして散らすと詠んだもので、その花を散らす風を恨まない心を、常識的な見方と異なる思い入れの深いものと見て、高く評価したのであろう。

一方、「ふかし」を用いて定家が評したのは、次の歌である。

憂世（うれせ）にはほかなかりけり秋の月ながむるままに物ぞかなしき（十六番左、持）

すつとならばうき世をいとふしるしあらんわれみばくもれ秋の夜の月（十六番右、持）

風さえてよすればやがて氷りつつかへる波なきしがのからさき（二十五番右、勝）

初めの二首は、同じ十六番の左右の歌で、月の歌であるが、憂き世に関する思いを歌う。終わりの一首は志賀の唐崎の冬の様子を詠んでいるが、寄せる波がそのまま凍って返る波がないと歌う。やはり思い入れの深い作として「ふかし」と評したと見られる。

3 「さび」

評語「さび」は、『宮河歌合』の判詞に見える用例は二例であるが、『千五百番歌合』の定家の判詞には見えず、西行の歌の特長の一面に触れるところがあるかと思われるので、一応とり上げておきたい。歌合判詞に見られる「さび」の用例は、俊成のものが最も古く、『御裳濯河歌合』にも二例の用例がある。俊成の「さび」は、主に寂しい情景などを飾らず新奇でない言葉で表現した歌に、落ち着いた渋い趣を見いだしたような場合、この評語を用いていると見られる。『宮河歌合』で「さび」の評語の用いられたのは、次の歌である。

人きかぬふかき山路の郭公なくねもいかにさびしかるらん（二十二番右、負）
わが心さこそ都にうとくならめ里のあまりにながゐしてけり（二十七番左、負）

これらが「さびて」と評せられている。定家は俊成に倣ってこの評語を用いたのであろう。

4 「きよし」

評語「きよし」も、『宮河歌合』の判詞に見える用例は二例であるが、『千五百番歌合』の定家の判詞には見えないので、一応とり上げておく。「きよし」を用いた一例は、

かぞへねど今夜の月のけしきにて秋の半（なまじ）を空にしるかな（十一番左、勝）

の歌を「歌のすがたたかく、こと葉清くして」と評したもので、歌の言葉について「きよし」と評している。これに対して今一例は、

かくれなくもにすむ虫はみゆれども我からくもる秋の夜の月（十五番右、勝）

の歌を「もにすむ虫かくれぬ月のひかりも、空清く侍れば、まさると申すべきにや」と評したものである。「空清く」は『新編国歌大観』での形で、『平安朝歌合大成』には「底清く」とあるが、いずれにせよこの場合は、表現された情景について「きよし」と評している。なお「きよし」は『御裳濯河歌合』には見えないが、「きよげなり」は『中宮亮重家朝

『臣家歌合』の俊成の判詞に用例がある。

5 「やすらかにいひくだす」の類

『宮河歌合』の判詞に見える「やすらかにいひくだす」(一例)、「とどこほる所なくいひくだす」(一例)、「とどこほる所なくいひながす」(一例)などは、ほぼ同様の内容を示す同類の評語と思われる。この類の評語は『千五百番歌合』の定家の判詞にも二例ほど用例はあるが、歌合の規模を考えると『宮河歌合』の用例は比較的多いので、定家が西行の歌の特長と見た一面を示すかと思われる。これらの評語の用いられた歌に即して見ると、

年をへてまつもをしむも山ざくら花に心をつくすなりけり(六番左、持)

の歌を、「花を思へる心ふかく、詞やすらかにいひくだされて侍れば」と評する。また、

わきてけふ相坂山のかすめるは立ちおくれたる春やこゆらん(二番右、勝)

の歌を、「今すこしとどこほる所なくいひくだされて侍れば、まさるべくや」と評する。また、

程ふればおなじ都のうちだにもおぼつかなさとはましものを(二十七番右、勝)

の歌を、「とどこほる所なくいひながされて侍れば、勝とや申すべからん」と評する。どの歌も平明に言葉が続け、のびやかに詠まれていて、そういう面での西行の歌の特長を定家は評価しているのであろう。『御裳濯河歌合』の俊成の判詞には直接これに相当する評語はない。ただし『別雷社歌合』の俊成の判詞には、「やすらかにいひくだして」(霞六番)と評した先例がある。

6 「詞巧みなり」の類

『宮河歌合』の判詞に見える「詞巧みなり」(一例)、「詞心巧みなり」(一例)も、言葉の巧みさを特定の方面で評価した「言の葉のよせあり」(一例)などと併せると、やや目立って見えるので、とり上げておく。これらの評語の用いられた歌に即して見ると、

わかなおふる春の野守に我成りてうき世を人につみしらせばや（三番右、負）

の歌を、「詞巧に心をかしくはみえ侍るを」と評している。ただこの歌で、若菜摘みの「摘み」に仏法に背く意味での「罪」を掛けた表現は、「詞巧に」と評せられるところに該当するのであるが、「なべての歌には猶如何にぞ聞ゆべからん」と批判されていることは、先に歌の詞に関する批判の項で触れた。次に、

風もよし花をもさそへいかがせん思ひはつればあらまうき世ぞ（十番右、勝）

の歌を、「風もよしとおけるより、終句のすゑまで、詞心たくみに、人及びがたきさま」と高く評価している。これは三句まで句ごとに言い切りながら畳みかけた言葉運びを下句で受け止める形で、句間の間を生かして心の動きを如実に表現した点を評価したのであろうか。なお、

なにとかく心をさへはつくすらん我がなげきにてくるる秋かは（二十番右、負）

の歌について、「心をさへはつくすらんなどいへる、言のはのよせありて」と評している。これは、心まで「尽くす」物思いをすると詠んだのが、下句の「暮るる秋」すなわち九月、尺と言葉の上で「よせ」（縁）があるのに触れた評と思われる。するとその点でやはり言葉の巧みさを評価しているのであろう。

『御裳濯河歌合』の俊成の判詞には、これらに類する評語は見られないが、治承三年の『右大臣家歌合』の俊成の判詞には、「言葉たくみに」（三十番）の評語が用いられている。

7 「心ふかくなやます」

「心ふかくなやます」は、『宮河歌合』の判詞に一箇所だけ用いられている評語であるが、西行が「贈定家卿文」の中で、自作に即して新しく作られた適切な評語として喜ぶ心を記しているので、注目される。この評語の用いられたのは、次の歌である。

世の中を思へばなべてちる花の我が身をさてもいいづちかもせむかさまにせん（平安朝歌合大成）（九番左、勝）

この歌を、定家は次のように評する。

世の中を思へばなべてといへるより、をはりの句の末まで、句ごとにおもひ入れて、作者の心ふかくなやませる所侍れば、いかにも勝ち侍らん。

一首は落花に寄せた述懐の歌で、無常の世の中で自己の人生の行方を思つて悩む心を詠んでいるが、こういう心は西行の生涯を通じての根本的な思いに属するもので、それを定家が新しい評語を用いて評した点を、西行は喜んだのであろう。

「贈定家卿文」には西行の次の言葉が見える。

九番の左の、我が身をさてもといふ歌の判の御詞に、作者のこころふかくなやませる所侍ればとかかれ候。かへすがへすおもしろく候物かな。なやませると申御こと葉に、万みなこもりて、めでたくおほえ候。これあたらしくいでき候ぬる判の御こと葉にてこそさふらふらめ。古はいと覚候はねば、歌のすがたに似て、いひくだされたるやうに覚候。

従来使われてきた評語によって記すとすれば、「心ふかし」などが用いられるところであろうかと思うが、「作者の心ふかくなやませる」と、この西行の歌の心に迫った評語を用いた点を、西行は喜んでいられると思われる。

以上、『宮河歌合』の判詞で、定家が西行の歌の特長に触れて用いたと思われる評語の主なものをとり上げて考察した。これらの評語は、歌の心に関するものが目立つようにも見えるが、歌の詞や姿に関するものもある。定家は西行の歌の心・詞・姿の各方面について幅広く特長を見いだしているようである。

その定家の評語がかなり多様な種類にわたることは、『千五百番歌合』での定家の評語や『御裳濯河歌合』での俊成の評語と比べると、ある程度客観的に知られる。そしてこの評語の種類の様子は、先に評語を挙げた際に「……の類」とまとめたものが目立つことから知られるように、ほぼ同様の内容でも種々の言い方をしていられる面をもつ。これは定家が限ら

れた評語にとらわれず、対象とする歌の多彩な特長に応じて評語をかなり自在に用いたところがあることを示すように思う。それで西行の歌に即して「心ふかくなやます」といった新しい評語も用い、西行を感服させたのであろう。

『御裳濯河歌合』で俊成の用いた評語を参照すると、「あはれふかし」「心ふかし」「さび」などは俊成が用いているので、定家がそこから影響された可能性が考えられるが、俊成の用いていない評語も相当にあり、これらは定家が『御裳濯河歌合』での俊成の評語と関係なく用いたものである。しかし、それらの評語も多くは他の歌合の俊成の判詞に用例があるから、定家が俊成から評語を学んでいることは考えられる。ただ定家は俊成から学んだ評語でもそれを多様に使い生かし、さらに新しい言い方の評語を工夫して、西行の歌の特長に迫ろうとした点が、注目されると思う。

注1 『宮河歌合』の判詞に見える評語の所在を挙げる。数字は歌合の番数を示す。(例えば3は三番を示す。)

- よろし 13 17 24 25 35 をかし 3 5 9 20 優なり 17 22 29 34 あはれなり 3 6 27 29 あはれふかし 7 15 心ふかし 6 8 36 ふかし 16 25
- おもひ入る 9 22 うるはし 10 13 25 さび 22 27 きよし 11 15 艶なり 5 心あり 34 やすらかにいひくたす 6 とどこほる所なくいひくたす 2 とどこほる所なくいひながす 27 詞心巧みなり 3 詞心巧みなり 10 幽玄 1 面影あり 22 いひしりて聞ゆ 21 心ふかくなやます 9 たかし 11 さること 29 言のはのよせあり 20

注2 『千五百番歌合』秋四冬一の判詞に見える評語の所在を挙げる。数字は歌合の番数を示す。

- よろし 775 791 795 796 803 804 807 826 839 846 847 855 866 873 893 896 をかし 753 758 760 765 769 772 774 778 785 790 799 804 810 811 813 815 818 818 824 845 850 851 857 859 860 862 869 870 871 872 883 885
- 889 892 898 899 900 優なり 754 776 777 788 795 807 819 830 833 836 842 850 859 860 868 886 890 895 あはれなり 762 心ふかし 751 767 772 797 ふかし 752 888 おもひ入る 755 792 835
- うるはし 757 834 891 艶なり 756 776 800 804 812 851 869 心あり 793 854 857 900 やすらかにいひくたす 778 とどこほる所なくいひくたす 784 詞巧みなり 828 幽玄 751 780 面影あり 807 いひしりて聞ゆ 806 めづらし 753 760 785 852 855 858 面影をかし 787 797 872 886 面影うかぶ 781 目の前にむかへる心地す 898 はじめをはりかなふ 773 784 811 879 ことわりきこゆ 831 873 876 ことわりかなふ 789 815 たけあり 756 824 みどころあり 855 867 心巧みなり 797 811 心詞巧みなり 872 景気甚幽 771 あはれをつくす 752 花麗 766 きらきらし 872 余情あり 761 おもしろし 767 さびし

注 3 782 心の色ふかし 799 よれるところあり 758 思ひよりがたし 888 詞なだらかなり 876 詞けちかし 870
 よろし 7 8 10 22 7 をかし 5 8 9 11 12 15 17 21 25 27 28 30 31 優なり 10 21 あはれふかし 20 23 心ふかし 1 3 7 18 19 20 24 25 26 28 30 36
 うるはし 3 3 さび 20 21 艶なり 12 17 22 心あり 4 27 幽玄 18 29 こともなく 3 8 10 めづらし 13 16 心こもる 14 23 たけたか
 し 3 16 たけあり 23 おもしろし 13 ゆゑあり 19 よしあり 24